

論文の内容の要旨

論文題目 Coping and Mental Health of Adolescents in Japanese Schools in Europe: A
Comparative Study with Adolescents in Public Schools in Japan

和訳 欧州の日本人学校にかよう青年のコーピングと精神保健：日本
の公立学校の青年との比較研究

指導教官 栗田 広 教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 13 年 4 月進学

博士後期課程

健康科学・看護学専攻

氏名 加藤 星花

目的

日本社会の国際化に伴い、海外で勤務する日本人が増加している。そのような両親と共に海外に渡り、海外生活を送る児童および青年も増加している。一般に、異なる文化圏へ移住するとき、文化変容ストレスが生じ、その反応として児童および青年の抑うつ状態、攻撃的行動および薬物使用などが報告されている。また帰国子女の帰国後の学校への適応問題も考慮する場合、青年たちが海外に在住しているときにこそ、帰国後の環境に柔軟に適応できるような適切なサポートが必要なのではないかと考えられる。そこで本研究では、欧州に在住し日本人学校に通う日本人の青年の精神状態を把握し、都内の公立学校の青年と比較を行う。また、彼らの精神および行動の問題と、コーピング、他の文化変容的ストレスとの関連を明らかにすることを目的とする。

方法

調査は、平成 15 年 6 月下旬から 7 月上旬にかけて行なわれた。欧州に暮らす日本人

の青年について（以下、欧州グループ）、文部科学省がホームページ上で公開している、海外子女教育・帰国児童生徒教育等に関する総合ホームページ(CLARINET)に掲載されている欧州地域の日本人学校 26 校より、調査協力の得られた 7 校から男子 70 人（平均年齢；11.7 歳、SD；1.8）、女子 57 人（平均年齢；11.6 歳、SD；1.7）を本研究の対象とした；内訳は以下のとおりであった。チューリッヒ（スイス）14 人（男子；12 人、女子；2 人、平均年齢；13.3 歳、SD；1.22）、ウィーン（オーストリア）7 人（男子；3 人、女子；4 人、平均年齢；13.7 歳、SD；0.95）、ロッテルダム（オランダ）42 人（男子；22 人、女子；20 人、平均年齢；11.7 歳、SD1.52）、ブカレスト（ルーマニア）16 人（男子；9 人、女子；7 人、平均年齢；11.2 歳、SD；1.56）、ワルシャワ（ポーランド）16 人（男子；7 人、女子 9 人；平均年齢；11.1 歳、SD；1.73）、プラハ（チェコ）32 人（男子；17 人、女子；15 人、平均年齢；11.0 歳、SD；1.81）。また都内の公立小学校 2 校と公立中学校 1 校から、小学 4 年から 6 年生と、中学生 1 年から 3 年生までの男子 169 人（平均年齢；11.5 歳、SD；1.6）と女子 198 人（平均年齢；11.0 歳、SD；1.9）を比較群とし（以下、日本グループ）、調査者が作成した質問紙調査を行った。質問紙は Youth Self Report（以下、YSR）、コーピング尺度、生活満足度から構成されていた。また、欧州グループの子ども達の質問紙には、過去の海外生活経験の有無、現在の海外生活期間、現地の言語および日本語の能力、そして帰国後の不安に対する質問も追加した。チューリッヒ日本人学校とウィーン日本人学校には、調査者本人が直接現地に赴き、質問紙の回収と校内の見学を行った。

結果

小学生と中学生に分けて、性別ごとに欧州グループと日本グループ間で、YSR とコーピング尺度の比較を行なった結果、小学生では、グループ間に有意差は認められなかった。一方、中学男子では「不安/抑うつ」が、中学女子では「身体的症状」、「注意/社会性の問題」および「非行的行動」において、全て日本グループが欧州グループも有意に高い得点であった。なお、欧州グループ内の男女間の比較では、小学生では「非

行的行動」のみ差が認められ、男子の得点が高く、中学生では差は認められなかった。欧州グループ内の、文化変容要因における精神保健の比較について、男女別に比較した結果を述べる。過去の海外生活経験の有無に関しては男女ともに、YSRにおける有意差は認められなかった。一方、現在の海外生活期間において、1年以上の滞在である長期滞在群とそれ以下の期間の滞在である短期滞在群に分けて性別ごとに比較した結果、女子でYSRの問題尺度で「YSR総得点」、「内向尺度」、「外向尺度」、「不安/抑うつ」、「注意/社会性の問題」、「非行的行動」に有意差が認められ、全て長期滞在群の女子の得点が悪かった。現地の外国語の聞き取り、話すことそして書くことについて、多くの女子が男子よりも力がないと感じていた。また、言語能力における性別ごとの比較では、女子においてYSRの「注意/社会性の問題」に有意差が認められ、現地の外国語および日本語の両方が難しいと感じる群の得点が最も悪かった。また、日本語の問題に関して群わけを行って比較した結果、日本語が難しいと感じている女子が、日本語に問題がないと答えた女子よりもYSRの「注意/社会性の問題」「非行的行動」の得点が悪かった。次にYSR総得点によりYSR正常群とYSR高得点群の2群に分けて、グループ別にコーピング尺度の比較を行った結果、欧州グループでは、「回避型コーピング」のみが、YSR高得点群がYSR正常群よりも有意に高い得点であった。最後に、欧州の日本人学校に通う子ども達の精神健康に関連する要因をロジスティック回帰分析で検討した結果、言語能力、回避型コーピング、および生活満足度の関連が認められた。

結論

欧州の日本人学校にかよう児童および青年は、日本の子ども達よりも精神および行動の問題が少ないことが示された。これは、現地の日本人学校の先生や生徒がほとんど日本人であること、日本の公立学校の授業カリキュラムと変わらないことなどによる馴染みのある環境が、文化変容ストレスを減少させると示唆される。また、欧州に住む子ども達には、積極型コーピングといわれている問題焦点型コーピングと情動焦点

型コーピングの関連が示唆され、このような積極的なコーピングによる対処が、欧州で暮らす子ども達の充実した生活を支援する可能性が高いことが示唆された。しかし彼らが日本に帰国する時、再び文化変容ストレスにより新たな問題が生じる可能性がある。その影響をできる限り少なくするためにも、欧州に住んでいる時から子ども達に日本の学校に関する情報を提供し事前に知っておいてもらうことや、彼らの積極的コーピング能力を両親や教師といった周りの大人でサポートしていく必要があると思われた。また、欧州で暮らす女子は、言語能力におけるストレスを受けやすい可能性が示唆され、ストレスを軽減するためにも、海外在住時に日本語と現地語に関するコミュニケーション能力の把握や、それらの問題から生じる不安や自信の無さを周りで受け止めてあげる必要性も示唆された。